之印章。裏書調様改作所に帳紙有之。尤御算用場奉行に相達御郡奉行には紙面に而案内。

朱書。追加、平十村に而も五ヶ山十村は、名改候段御算用場奉行より御用番に紙面出る格也。勿論副書所に而調る。享保十七子九月十四日祖山村新八、名太郎助と改候節も右之通之由、寺井半右衛門覺書に有之、寫置。

一、御扶持人山廻は御扶持人十村格、平山廻は平十村格。

一、御扶持被下百姓名改、并十村せがれに而も十村役不勤ものは、御郡奉行より申付、改作所へ案内之筈也。

一、享保十九申寅四月中居村三郎兵衛、三右衛門に改申度旨相願、前格之通窺に相成心得之所、勝手次第可申付旨、御用番より被仰渡、右書付も返り不申に付、御用番不破門左衛門・吉田宅右衛門兩印に而紙面相渡す。宛所は三右衛門と有之、四月十八日の日付なり。又元文三年七月十八日鹿野村孫次郎、先祖より之名恒方に改申節も願書付紛失、大塚彌五太夫口上に而申渡相濟申候由、覺書に有之。

一、寅四月十八日新川郡天正寺村彦三郎改作所に致持參候紙面寫置と、覺書に有之。如左。

山廻大田本江村善右衛門儀、名宗兵衛に改申度旨書付指出候に付、被指越候。右善右衛門儀、改作所にも願出付指出候に付遂僉議、改作所より承屆可申渡旨に付、改作所より願之通申渡候條、右願書付相返候。山廻役之儀、改作方より申付候に付如此に候。左様可被相心得候。以上。

五月十六日　　御算用場

杉浦權佐殿

熊谷津左衛門殿

四〇　郡打銀を以遣方之事

一、脇道筋橋入用、脇道渡し舟、并渡守給銀。

一、作食藏修理、道筋番人給銀。

但、新藏建申入用は御納戸銀。

一、往還道筋番人給銀。

一、中出藏より出船所に米出入用。但、中出藏番人給銀。

一、郡中用水普請入用。

一、能州三崎外海渡海之爲、毎年三月朔日より九月晦日迄夜中定燈油入用。

外、所々川除御普請入用、里子給銀并飯米代入用、往還道筋渡舟入用、并渡守入用、此三品も跡々郡打銀を以遣候所、寛文六年より小拂銀に而被仰付。

一、郡打銀何程出し可申旨十村共に申渡、其段御年寄衆中上る。

一、火事に逢申百姓は、三年之間郡打銀用捨仕也。

一、百貫目　改作方支配こえ代銀。

一、五拾貫目　惣郡御奉行支配馬持宿に御貸銀。

右兩様、御郡打銀所御奉行奥田治左衛門・根來九兵衛に御預也。

四一　獵師仕入銀割符之事

一、毎年貸申分　宮腰　淵上

一、年代り貸申分　木津　高松　田井　田嶋　南中條

銀高拾貫目也

右十月切也。當り申組書付出す也。

四二　領國中夫銀御免所々之事

一、新川郡　芦峅村　岩峅村　魚津

一、能美郡　河原山村

〆四ヶ所

四三　加賀越中兩國奥山之事

一、奥山と申は吉野より奥之分、并新川郡立山を奥山と申旨。

四四　見立免之切様之事

一、五百三拾石　高　免四つ三歩

百　石　不納

百五拾石　見立免三つ　此定納有免四拾五石

百五拾石　見立免貳つ五歩　此定納三拾七石五斗

百三拾石　無申分　此定納五拾五石九斗

右百三拾八石四斗を本高五三に而割ば、有免何つと見ゆる。見え不申分用捨免也。本高割也。